

琉球大学学術リポジトリ

多言語社会における言語教育に関する研究－ベトナム・タイグエン省をフィールドとして－

メタデータ	言語: 出版者: 村上呂里 公開日: 2009-09-02 キーワード (Ja): 国家語, バイリンガル教育, 言語権, 国語(クオツクグー), 民族語, ドイモイ政策, 多言語社会, ベトナム北部山岳少数民族地域, 国際研究者交流, 言語政策, 識字教育, ベトナム, 少数民族言語教育, 民族語学習と学力問題, 普通語, 多民族国家, ベトナムタイグエン省, 言語と学力問題, 多民族多言語社会, 近代言語教育史, 少数民族, 民族語教育 キーワード (En): language education, bilingual education, race's words, quoc ngu, multi-ethnic nation, national language, Vietnam, the ringht of language 作成者: 村上, 呂里, 梶村, 光郎, Murakami, Rori, Kajimura, Mitsurou メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/12267

多言語社会における言語教育に関する研究 ーベトナム・タイグエン省をフィールドとしてー

【第1年目研究成果中間報告書】

平成15－17年度科学研究費補助金

(基盤研究(B)(2))

課題番号15402049

研究代表者 村上 呂里
(琉球大学教育学部助教授)

2004年(平成16)年3月

目次

はじめに

- (1) 研究の目的 1
- (2) タイグエン師範大学について 3
- (3) 研究日誌 6

1. 調査研究の概要

- (1) ベトナム少数民族地域における言語教育の課題 9
～タイグエン師範大学ロック学長へのインタビュー～
- (2) 言語学院におけるインタビュー 18
- (3) タイグエン師範大学少数民族学生・教官へのインタビュー 23
- (4) クックドゥオン小学校におけるインタビュー 29
ロアン校長へのインタビュー
少数民族生徒へのインタビュー
(写真)
- (5) 識字学校におけるインタビュー 33
(写真)

2. 「多言語社会における言語教育研究会」における発表要旨

- (1) (ベトナム語)
「日越比較言語教育研究のために
近代日本の言語教育の出立—民族語・地域語の視座から—」……村上 呂里 35
- (2) 「ベトナムの多言語社会における言語教育」……ルオン ベン 44

3. ベトナム少数民族言語政策基本資料 51

4. ベトナム少数民族言語教育関係論文の紹介・考察

〈論文紹介・考察〉

- (1) ホアン ヴァン ハイ 59
「ベトナムにおける言語政策とその状況にかかる諸問題—現状と展望」について
- (2) ソン ズオン 72
「ベトナム山岳民族が居住する省における言語教育の実状の考察」について
(翻訳)
- (3) ルオン ベン 81
「少数民族地域における言語に関するホーチミン主席の意見を考察する」
- (4) ルオン ベン 87
「少数民族地域における小学校でのベトナム語教育の特徴と教員養成カリキュラムの問題点」

はじめに

(1) 研究の目的

日本の教室には、在日コリアンやアイヌ民族の子どもたちはじめ日本語を母語ないしは母国語としない子どもたちが存在してきた。が日本の言語政策は、単一民族国家幻想に支えられた『『国語』の思想』（イ ヨンスク）のもと、単一言語（＝国語教育）モデルをとりつづけ、彼らのことばの権利を省みることはなかったといえよう。グローバル化に伴う日本語を母語としない子どもたちの増加を踏まえ、どのようなことばの教育を展望するのかは、多言語教育の課題として、言語権の課題として、また「言語と学力」をめぐる課題として、実践的に思想的にさらに鋭く問われてくるだろう。本研究はベトナム北部山岳地帯タイグエン（Thai Nguyen）省を中心とする地域における少数民族言語教育の歴史と課題を現地調査に基づき実証的に明らかにし、そのことを通して近代国民国家形成期における単一言語（＝国語教育）モデルとは異なる多言語・多文化共生時代を切り拓く新たなことばの教育モデルへの示唆を得ることを目的としている。

本研究が、ベトナム少数民族地域の言語教育を対象とする理由について、以下述べる。

ベトナムの歴史は（ベトナム人の視点からふりかえるならば注①）、被侵略・被植民地化と抵抗の歴史であったといつてよいだろう。紀元前2世紀から938年独立を勝ち取るまで千年以上に及ぶ中国支配を受け、また近代においては、フランスによって1862年南部三省を、1867年には南部全域を、1884年までには中・北部も植民地化され、現代においては1975年ベトナム戦争が終結するまで激しくアメリカ侵略と戦わねばならなかった。ベトナムの言語文化は、そうした歴史の渦のなかで独自の発展を遂げてきた。すなわち前近代には中国文化の強い影響と葛藤のもとに漢越語を育み、近現代にはフランス語の強制と浸透との拮抗関係のもとにベトナム語をローマ字表記した「クオックグー Quoc Ngu（漢越：国語）」を育んできた。クオックグーは、最初フランスの政策意図によって利用されたが、その後ベトナム独立の礎としてとらえ返され、普及された。ベトナムは「国語」概念を持つ数少ない国の一つであるが、「クオックグー（国語）」の成り立ちには、帝国のものとして形成された日本の「国語の思想」とは異なる「国語の思想」形成が見られるといつてよいだろう。独立国家建設をめざすベトナム民主共和国および南北統一後のベトナム社会主義共和国における言語教育の最大の課題は、このベトナム語＝「クオックグー（国語）」の普及すなわち識字教育であった。

一方、多数民族キン族の他に53の少数民族からなる注②多民族国家であるベトナム政府は、一貫して少数民族固有の言語の権利尊重の理念を憲法で掲げてきている。

本土並み教育水準の達成、②学力の向上、③教育福祉、資質向上」(5月23日津嘉山教育長記者会見)を目標とし、「学力」の「本土並み」をめざす「学力向上運動」の核として「共通語」指導が引き続き重視された。このように近代以降、地域・沖縄の言語教育史は、母語の言語文化の土壌と国家語の教育間の矛盾が、さまざまな顕れ(「方言札」、「学力問題」…)をなしてきた歴史といえよう。多言語多文化共生社会を担うことばの教育を切り拓くためには、いったん沖縄地域や被植民地地域の「国語の思想」に拠る被暴力の痛みを踏まえることが必要不可欠であろう。

筆者らは、こうした沖縄地域の言語教育体験に発する視座を根底に据えつつ、ベトナム少数民族地域の言語教育体験を、なるべく現場の“声”を聞きながら検証していきたい。その過程を通して、沖縄地域とベトナム少数民族地域との間に「新たな共同性」(富山一郎)注③を求めることも本研究のもう一つの(alternative)目的である。

なおベトナムの言語文化の歴史と教育に関わる先行研究については、「日越比較言語教育研究(1)入門期国語教科書の考察」(『琉球大学教育実践センター紀要』第10号、2002年)にまとめている。併せて参照されたい。

また「エスニシティーの可変性」(今井昭夫、『言語』2004年5月号)と少数民族言語教育の関係性も興味深く、今後の課題としてあげられよう。

(2) タイグエン師範大学について

2003年8月22日、琉球大学教育学部はタイグエン師範大学と、学術交流協定を調印した。本研究は、主にタイグエン師範大学との学術交流を通して、本研究を遂行する。

タイグエン師範大学は、ベトナムの首都ハノイから北へ80キロのタイグエン省に位置し、北部山岳少数民族地域10省の拠点国立教員養成大学としてある。1966年ベトナム戦争のさ中に創立され、グエン ヴァン ロック (Nguyen Van Loc)学長以下、およそ650人の教官と12,000人の学生からなる。

タイグエン師範大学は、先述の少数民族の権利を掲げた憲法の条項に則り、少数民族の言語・文化の権利尊重を実践し、少数民族地域の教育、とりわけ初等教育の教員養成に責任を持つ。教官にも少数民族出身者を積極的に採用している。少数民族各地域に小学校教員として卒業生を多数送り出し、教員採用率は全学生の95パーセントに達し、教育省(日本の文部科学省に当たる)から表彰を受けているという。またロック学長を中心とし「ベトナム北部における少数民族の文化と言語の継承・発展に関する研究」に大学をあげて取り組んでいる。

独自の歴史と文化を持つ沖縄地域と、少数民族居住地域・タイグエンとは、教育の分野においても互いに通底する本質的課題を持っているといえよう。これらの課題について、教員養成という共通する観点からタイグエン師範大学の教官と共同で探求できることは、

ベトナム民主共和国の1959年憲法では「各民族は、風俗習慣を維持または改善し、言葉と文字を使用し、自らの民族文化を発展させる権利を有する。」の一文があり、ベトナム社会主義共和国の1980年憲法では「各民族は、言葉と文字を使用し、自らの秀でた文化・伝統・風俗習慣を文化を維持・発展させる権利を有する。」、1992年憲法5条では「各民族は、言葉と文字を使用し、民族の特質を維持しつつ秀でた風俗習慣・伝統・文化を発展継承する権利を有する。」と定められている。1980年には少数民族の文字に関する政府決定が出され、まだ文字を持っていない民族は、ローマ字表記の文字をつくるため援助を受けることができると定められた。

少数民族の言語の権利尊重の理念とともに、「普通語」としてのベトナム語普及も大きな課題とされた。1980年に出されたベトナム政府の第53号決議Ⅱ.1項目は「普通語と普通文字は、ベトナム民族共通の一般的言語である。それは、全国的に見て民族や地域による分け隔てがない伝達手段であり、地方や各民族の経済・文化科学技術等の面での発展に寄与し全人民の団結を強め、民族の平等権を実現するものである。したがって、すべてのベトナム公民は普通語と普通文字を学び使用する義務と権利を有している。」とベトナム語普及を強調している。第3項目では、「少数民族居住地域では、小学校と文化補修学校で、民族文字と普通文字を交互に教える。」という2言語併用の原則が提示されている。

独立国家を担う国民形成と多民族国家として国民形成という目標を統一的に追求しなければならなかったベトナムの言語教育、とりわけ「国民」化が鋭く問われる少数民族言語教育の現場は、理念と実践の狭間で、さまざまな試行錯誤・失敗・矛盾・問題を孕んできたと考えられる。ベトナムにおける「国語の思想」と少数民族の言語尊重の理念とはどのように関わりあうのか、またバイリンガル教育の内実はどうであるのか、進めていくうえでどのような矛盾・課題に直面してきたのか、少数民族側にその言語政策はどのように受けとめられてきたのか、などの問いが浮かんでこよう。また1986年ドイモイ政策への転換以降、市場経済化の流れの中で少数民族言語教育の課題がどのように変容するのも興味深い。日本とは異なる言語教育モデルを模索してきたベトナム少数民族地域の言語教育が抱えてきた矛盾・課題を検証することで、これからのことばの教育への示唆と展望を得られるのではないかと考えた。

本研究の問題関心を遡るならば、その源は沖縄地域における「国語」教育史研究にある。沖縄地域はかつては一つの王国を成していたが、「琉球処分」という名の下に1879(明治12)年、帝国日本に組みこまれた。帝国形成の核は言語教育にあり、「方言札」で知られるような地域語(シマグチ;「方言」)抑圧と一体となった国語=「標準語」教育が行われた。こうした「標準語励行運動」は15年戦争前にピークを迎えるが、戦後米軍占領下も引き続き「祖国復帰」運動と一体となった「正しいことば」としての「共通語」指導が行われた。さらに「祖国復帰」(1972年)以降も、発足したばかりの沖縄県教育庁は「①

本研究の特色となろう。一方で、国家の少数民族政策の遂行という側面を持つ国立師範大学を介して調査研究を行うという制約を意識しつつ、いかに少数民族の側の“声”を聞きうるかが、本研究の大きな課題となろう。

ベトナム行政区画地図

4 特別市 (中央直轄市)

- 1 Ha Noi
首都ハノイ
- 2 Ho Chi Minh City
ホーチミン市
- 3 Hai Phong
ハイフォン
- 4 Da Nang
ダナン

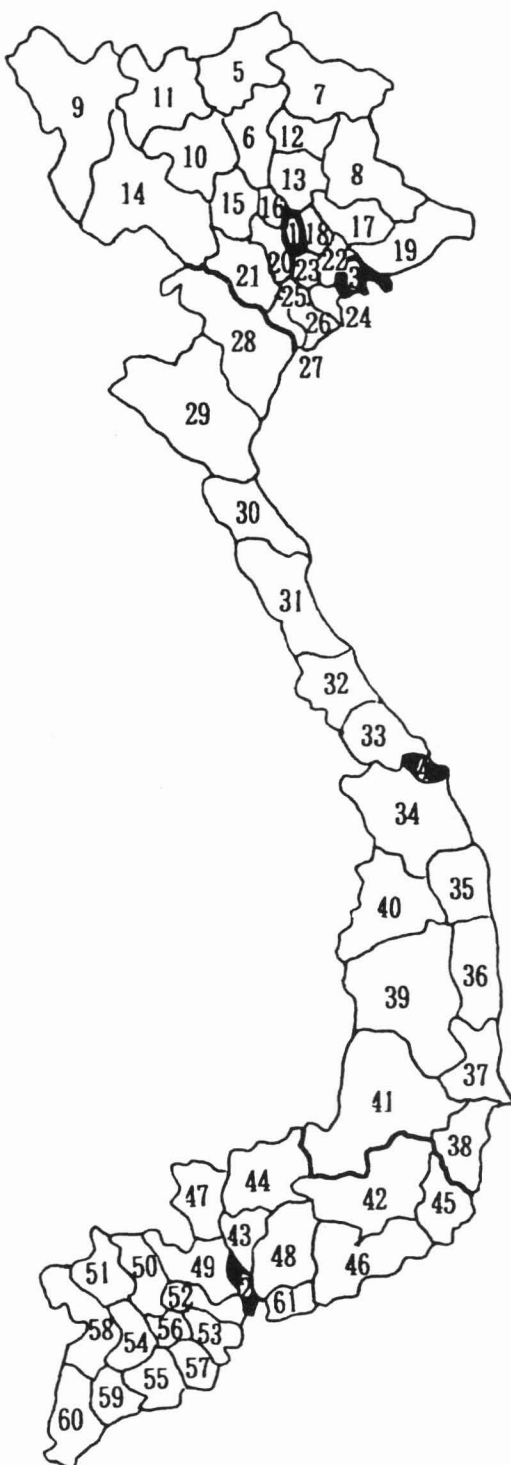
57 (地方) 省

<北部>

- 5 Ha Giang
ハザン
- 6 Tuyen Quang
トゥイエンクワン
- 7 Cao Bang
カオバン
- 8 Lang Son
ランソン
- 9 Lai Chau
ライチャウ
- 10 Yen Bai
イエンバイ
- 11 Lao Cai
ラオカイ
- 12 Bac Kan
バックカン
- 13 Thai Nguyen
タイグエン
- 14 Son La
ソンラ
- 15 Phu Tho
フートー
- 16 Vinh Phuc
ビンフック
- 17 Bac Giang
バックザン
- 18 Bac Ninh
バックニン
- 19 Quang Ninh
クワンニン
- 20 Ha Tay
ハテイ
- 21 Hoa Binh
ホアビン
- 22 Hai Duong
ハイズオン
- 23 Hung Yen
フンイエン
- 24 Thai Binh
タイビン
- 25 Ha Nam
ハナム
- 26 Nam Dinh
ナムデイン
- 27 Ninh Binh
ニンビン

<中部>

- 28 Thanh Hoa
タインホア
- 29 Nghe An
グアーン
- 30 Ha Tinh
ハティン

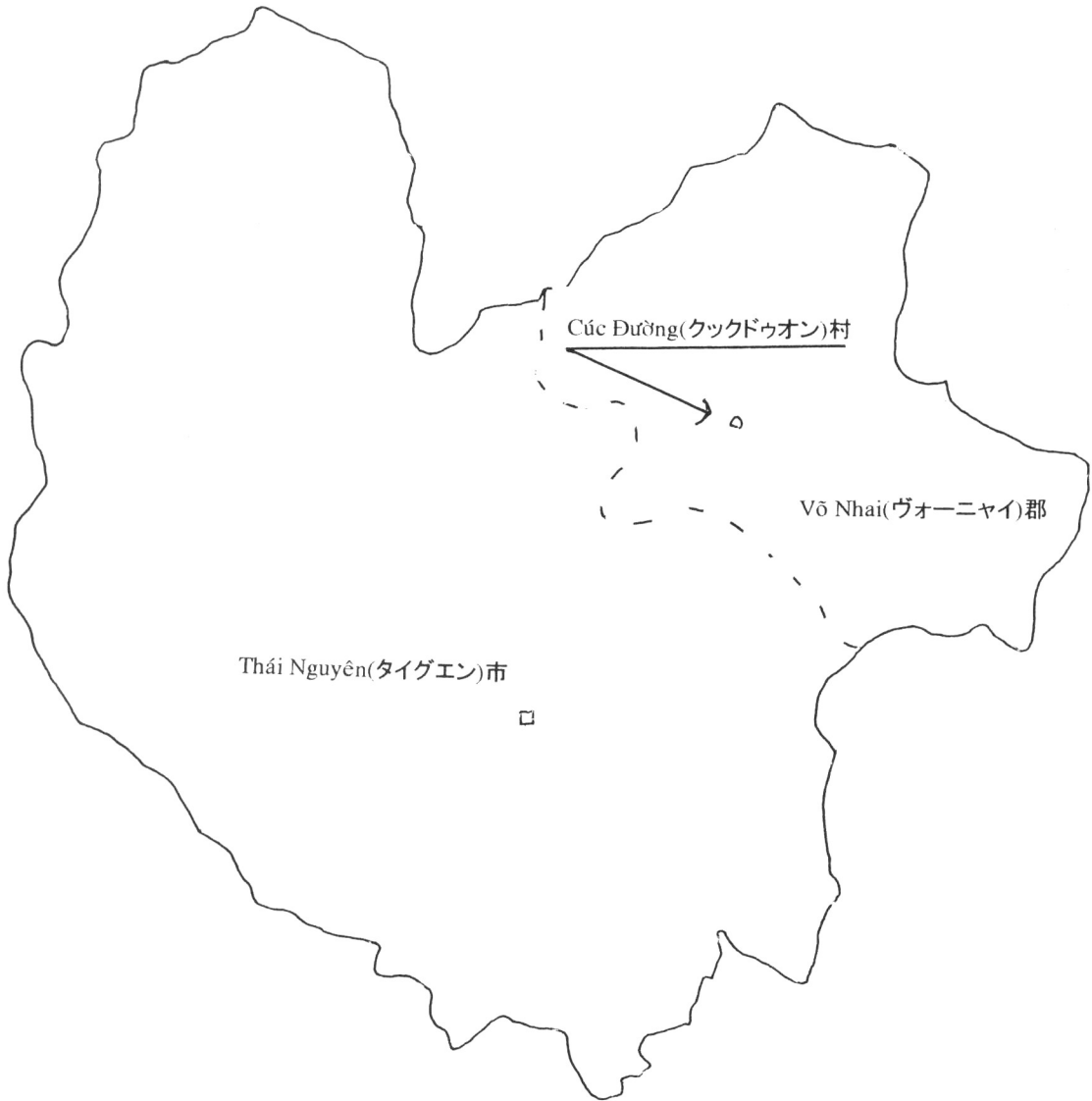


- 31 Quang Binh
クワンビン
- 32 Quang Tri
クワンチ
- 33 Thua Thien Hue
トゥアティエンフエ
- 34 Quang Nam
クワンナム
- 35 Quang Ngai
クワンガイ
- 36 Binh Dinh
ビンディン
- 37 Phu Yen
フーイエン
- 38 Khanh Hoa
カインホア
- 39 Gia Lai
ザライ
- 40 Kon Tum
コントゥム
- 41 Dak Lak
ダクラク

<南部>

- 42 Lam Dong
ラムドン
- 43 Binh Duong
ビンズオン
- 44 Binh Phuoc
ビンフオック
- 45 Ninh Thuan
ニントゥアン
- 46 Binh Thuan
ビントゥアン
- 47 Tay Ninh
テイニン
- 48 Dong Nai
ドンナイ
- 49 Long An
ロンアン
- 50 Dong Thap
ドンタップ
- 51 An Giang
アンザン
- 52 Tien Giang
ティエンザン
- 53 Ben Tre
ベンチエ
- 54 Can Tho
カントー
- 55 Soc Trang
ソクチャン
- 56 Vinh Long
ビンロン
- 57 Tra Vinh
チャビン
- 58 Kien Giang
キエンザン
- 59 Bac Lieu
バックリイエウ
- 60 Ca Mau
カマウ
- 61 Ba Ria Vung Tau
バリアブントウ

タイグエン省地図



今年度の本研究の遂行において、ロック学長にはさまざまな配慮をしていただいた。また研究内容において核となって協力していただいたのがルオン ベン教授である。ルオン ベン教授は、ご自身タイ（Tay）族の出身であり、少数民族の言語や文化への深い愛情を感じさせる研究者である。今後とも本研究の進展において大切な共同研究者となろう。

(3) 研究日誌

2003年8月20日～27日

タイグエン師範大学と琉球大学教育学部間で国際交流に関する協定書に調印するためにグエン ヴァン ロック学長、ファム ティ ミイ (Pham Thi My) 国際関係学部人材育成科副主任、グエン ヴィン クワン (Nguyen Vinh Quang) 外国語学部副学部長の3名が琉球大学教育学部を訪問した。

- 8月22日 調印式を行う。
- 8月24日 3名にタイグエン師範大学における少数民族言語教育の特色と課題についてインタビューを行う。

2003年12月22日～29日 (第一回調査)

梶村光郎、那須 泉、村上呂里および松尾興 (琉球大学教育学部学生) の3名で、ベトナム国立人文社会科学センター言語学院とタイグエン師範大学を訪問した。

- 12月23日 ベトナム国立人文社会科学センター言語学院の研究者タ ヴァン トン (Ta Van Thong) 氏、グエン フウ ホアイン (Nguyen Huu Hoanh) 氏の2名に、ベトナム少数民族の言語教育に関するインタビューを行う。
- 12月25日 タイグエン師範大学のルオン ベン (Luon Ben) 教授とファム ティ ミイ教授らとともに、タイグエン省ボーニャイ (Vo Nhai) 郡クックドウオン (Cuc Duong) 小学校およびその分校の識字学校を訪問する。校長のチャン ティ ロアン (Tran Thi Loan) 先生に、クックドウオン小学校の概観と課題についてインタビューを行う。少数民族の小学生にも2名インタビューを行った。
識字学校 (教師はウエン ヴァン タイン (Uyen Van Thanh) 先生お一人) では、学習者の方2名にインタビューを行った。
- 12月26日 タイグエン師範大学の少数民族学生にインタビュー調査を行った。

2004年2月28日～3月6日 (第1回「多言語社会における言語教育研究会」開催)

タイグエン師範大学からルオン ベン語学文学科教授、ファム ホン クワン (Pham Hong Quang) 国際関係学部人材育成室室長、ファム マイン フン (Pham Manh Hung) 語学文学科教授の3名が、「多言語社会における言語教育研究会」出席のため、琉球大学教育

学部を訪問した。

- 3月2日 「多言語社会における言語教育研究会」(第一日目)
村上が「日越比較言語教育のために 日本近代言語教育の出立—地域語・民族語を視座に—」を発表、質疑応答を行った。
- 3月4日 「多言語社会における言語教育研究会」(第二日目)
ルオン ベン教授が「ベトナム少数民族言語教育の歴史と課題」を発表、宮城信勇氏(2003年度伊波普猷賞受賞)が『石垣方言辞典』完成への道のりと思い」を発表、各々質疑応答を行った。名嘉順一元琉球大学教育学部教授が、双方の発表を聞いて、コメントを述べた。

以上、第1年目の研究の概略を述べた。本報告書は、第1年目の中間報告書であり、調査結果に基づき、本格的に論文化するには至っていない。調査結果の報告および本研究に関わる重要論文の紹介・考察にとどまっていることを、予めお断りしておきたい。

研究分担者梶村光郎教授には本研究の全日程に参加していただき、共同で調査や研究会を行っている。本研究報告書ではホァン ヴァン ハイ論文の解説を行っている。本研究に関わる通訳、翻訳については、その一切を那須 泉(琉球大学共通科目ベトナム語担当)に負っている。彼のベトナム社会および文化への深い理解なくして本研究は成り立ちえない。タイグエン省における調査研究には松尾興(琉球大学教育学部学生)が同行し、記録等の任を果たしてくれた。インタビュー調査のテープ起こし等については、鈴木結(同法文学部学生)、前田理恵(同法文学部学生)にお願いした。なお、松尾興、鈴木結の二人は、2004年9月よりタイグエン師範大学に留学する予定である。ベン先生が、彼らの指導に当たってくれる。

2004年3月

村上 呂里

注)

①たとえばカンボジアにとって、ベトナムは侵略国である。

②「エスニシティの可変性」(今井昭夫、『言語』2004年5月号)によれば、民族の数は国家によって可変的であり、この数字は現在国家が定めたものにすぎない。

③富山一郎『戦場の記憶』(1995、日本経済評論社)に拠る。富山は、以下のように述べる。

この新たな共同性とは、かつてあった伝統でもなければ、近代とは無縁の小宇宙でもなく、あえていえば、近代を希求しつづけてきたがゆえに発見され、構成された過去であり、過去の記憶である。またそれは、「日本人」になるということにかかわるすべての人々に共有され、「日本人」になるということが生みだした暴力により殺されていった人々との共同性を確保する思想である。

本稿ではこれに学びながら、「新たな共同性」を「帝国に抛る暴力の痛みを起点として求められる共同性」という意味あいを用いている。